姫路市埋蔵文化財センター調査報告　第 67 集

別所村前遺跡発掘調査報告書

調査区全景（北から）

２０１８

姫路市教育委員会

調査にいたる経緯

姫路市別所町別所字加茂下 1899 番において工場建設が計画された。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である別所村前遺跡（県遺跡番号 020561）に該当し、事業地内での埋蔵文化財の状況を把握するため確認調査を実施した。確認調査では、建物計画範囲の北東端と南東端、西辺中央部の合計３ヶ所に調査区を設定した。

確認調査の結果、北端隅の調査区において幅約１ｍの溝状遺構を確認し、埋土から須恵器杯身が出土した。また、他の調査区では遺構は確認できなかったものの、当該地における地山に相当する層が良好に残存していることが確認された。これらのことから、事業地内において埋蔵文化財が保存していることが明らかとなったため、開発によって埋蔵文化財が破壊される基礎部分について本発掘調査を行うこととなった。

平成 29 年（2017）年６月５日にテクノプロバイダー株式会社と姫路市が姫路市別所町別所字加茂下 1899 番の開発に伴う埋蔵文化財（別所村前遺跡）発掘調査委託契約書を締結し、同年６月 13 日から埋蔵文化発掘調査を実施した。調査面積は 113 ㎡で、調査期間は平成 29 年（2017）年６月 13 日から６月 27 日までである。

調査の位置と周辺の歴史的環境

調査地が位置する別所村前遺跡は姫路市南東部に位置する。別所村前遺跡は、中播都市計画事業別所土地区画整理事業に先立って、平成 2 年度から実施された確認調査で発見された。翌年からはじまった区画整理事業に伴う発掘調査では、縄文土器や旧石器時代の打製石器が出土している。また、遺構としては平安時代後期から鎌倉時代にかけての掘立柱建物跡を検出している。

周辺の遺跡では、調査地の北西に位置する東芝崎遺跡では、幅約 3m、深さ約 60 ㎝の流路の底から縄文時代晩期前半の土器が出土している。

調査地周辺で弥生時代の集落跡は確認されていないが、志ノ坪遺跡では流路から弥生土器が出土し、土器の状態などから周辺に弥生時代の集落が存在する可能性が高いと考えられる。同遺跡においては、古墳時代後期の竪穴建物跡が 15 棟確認されているが、周辺には三ツ塚古墳や別所山古墳などの後期古墳が存在しており、集落と墓域の関係を知ることができる。また、古代の掘立柱建物が 84 棟確認され、建物跡に伴う遺物として杯や皿の他、緑釉陶器や蹄脚硯などが出土している。南東には佐突駅家跡に推定されている北宿遺跡との関係性などから地方の公的施設もしくは地方有力層の居宅である可能性が高いものと考えられている。

調査地のすぐ北側に位置する別所構跡では、中世の柱跡・井戸・土坑などとともにコの字状に配置された３条の溝が見つかっている。特に南側の溝は幅５m、深さ約２ｍと深く、断面が逆台形をしており、当地における構（別所構居）の伝承を裏付ける堀の遺構の可能性が指摘されている。

このように、調査地周辺には各時代の遺跡が存在し、古くから連綿と人々の営みがつづいていることが覗える。

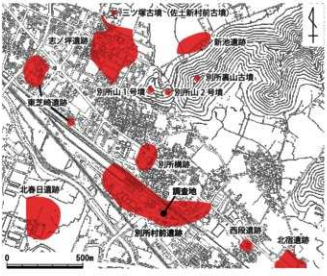

図1　調査地周辺の遺跡（S=1:25,000）

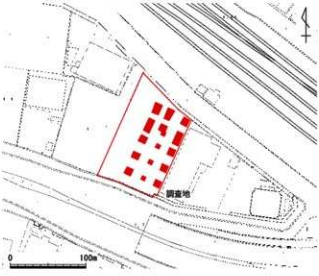

図2　調査位置図（S=1：5,000）

調査の成果

基本層序　建物基礎部分の 15 ヶ所で発掘調査を行った (1 区～ 15 区)。いずれの調査区においても基本層序は同様であり、第Ⅰ層は盛土、第Ⅱ層は耕土（黄褐色 2.5Y5/4 極細砂混じりシルト）、第Ⅲ層は床土（オリーブ褐色 2.5Y4/3 極細砂）、第Ⅳ層が地山（明黄褐色 2.5Y7/6 シルト）である。第Ⅴ層は地山の下層の堆積層（灰白色 2.5Y8/1 シルト）である。今回の発掘調査では、第Ⅳ層上面で遺構を検出した。遺構検出面の標高は約 3.8m である。

遺構　土坑（SK）5 基、ピット（SP）2 基、溝（SD）5 条、河道（NR）2 条を確認した。以下、主な遺構を記載する。

SD1　1 区で検出した。幅約 1 m、深さ 20 ㎝を測る。調査区の北西から南東に伸びる溝である。埋土からは、須恵器及び土師器の小片が出土している。いずれも細片であるため図化することができなかった。

NR1　2 区～ 5 区、及び 7 区で検出した。調査地を北西から南東に流れる河道である。3 区・5 区・7 区において南側の肩を確認した。建物基礎の掘削深度の関係から、河道をすべて掘削することができないため、断割調査により河道の深さを確認した。河道は最も深いところで約 70 ㎝を測る。また、2 区では調査区北東隅に位置する SK2 から出土した須恵器の杯身が NR1 出土の破片と接合した。このことから、SK2 は本来は NR1 と一連の遺構であり、NR1 の北側の肩部は現況よりもさらに北側に位置していた可能性が高い。NR1 からは、土師器の壺、須恵器の杯身・杯蓋・壺などが数多く出土した（図 6－1 ～ 9、11 ～ 13）。

NR2　12 区・14 区・15 区で検出した。調査地を北東から南西へ流れる河道である。NR1 と同様の理由により断割調査によって河道の発掘調査を行ったが、全容を確認するには至らなかったが、12 区・14 区で北側肩、15 区が南側の肩にあたると考えられ、川幅は約 3.8m と推定される。埋土からは須恵器や土師器が出土している（図 6－10）。

遺物　今回の調査では、河道（NR1・NR2）から須恵器・土師器が多く出土した。いずれも田辺編年の TK43 から TK209 に該当し、古墳時代後期（7 世紀前半）の範疇に収まるものである。実測遺物の詳細については遺物観察表（表 1）において記載する。

まとめ

調査区を北西から南東に流れる古墳時代後期の河道を 2 条確認した。調査地の西側で平成 22 年（2010）年に行われた確認調査においても同一方向に伸びる流路を検出しており、この一帯が河道域であることが明らかとなった。また、竪穴建物跡や掘立柱建物跡など集落が想定されるような遺構は確認できなかったものの、河道から出土した土器には比較的大きなものが多く、土器の形状などから近隣に古墳時代後期の集落が形成されていた可能性が高いと考えられる。

今回の発掘調査では、各調査区が狭小であり、遺構の全体像を把握するには至らなかったが、別所地域の様相を考える上で貴重な成果を得ることができた。

番号	種別	器種	地区	出土遺構	口径	底径	器高	色調(内)	色調(外)	焼成	胎土	残存状況	調整(内)	調整(外)	備考
1	須恵器	杯	2区	NR1/ SK2	(11.8)	－	3.8	N8/	2.5GY	普通	φ1mm前後の黒色粒混入	口径の1/4	ロクロナデ	ロクロナデ ヘラケズリ	自然釉付着
2	須恵器	杯	2区	NR1	11.8	－	2.95	10YR6/2	10YR6/1	軟	φ1mm以下の白色粒を多く含む	口径の1/2	ロクロナデ	ロクロナデ ヘラケズリ	
3	土師器	壺	3区	NR1	(10.9)	－	(3.7)	10YR4/2	7.5YR7/6	普通	φ2mm以下の砂粒を少量含む	口径の1/4	ナデ	ナデ	
4	須恵器	杯	3区	NR1	－	－	(2.05)	2.5Y7/1	5Y7/1	軟	φ1mm以下の白色粒を多く含む	口径の1/5	ロクロナデ	ロクロナデ	
5	須恵器	杯	3区	NR1	－	－	(2.25)	N7/	N7/	普通	φ1mm程度の白色砂粒を多く含む	口径の1/20	ロクロナデ	ロクロナデ	
6	須恵器	蓋	3区	NR1上層	(13.0)	－	(3.7)	N7/	N8/	普通	φ1mm前後の白色粒を含む	口径の1/6	ロクロナデ	ロクロナデ	
7	須恵器	杯	7区	NR1	－	－	(2.05)	N8/	2.5Y7/1	普通	φ1mm以下の黒色粒を多く含む	口径の1/10	ロクロナデ	ロクロナデ	
8	須恵器	杯	7区	NR1	－	－	(2.85)	N8/	N7/	普通	φ1mm以下の白色粒を含む	口径の1/7	ロクロナデ	ロクロナデ	
9	須恵器	蓋	7区	NR1	(13.8)	－	(8.6)	N8/	N8/	普通	φ1mm以下の白、黒色粒砂粒を多く含む	体部の1/4	ロクロナデ	ロクロナデ	摩滅
10	須恵器	蓋	12区	NR2上層	－	－	(3.0)	N7/	N7/	普通	φ2mm以下の白色粒を含む	口径の1/10	ロクロナデ	ロクロナデ	
11	須恵器	蓋	2区	NR1上層 機械掘削	－	－	(3.8)	N7/	N7/	普通	φ1mm以下の砂粒をやや多く含む	口径の1/7	ロクロナデ	ロクロナデ	
12	須恵器	杯	2区	NR1上層 機械掘削	－	(8.1)	(1.55)	N8/	N8/	普通	φ1mm程度の白色粒まれに含む	高台の1/5	ロクロナデ	ロクロナデ	
13	土師器	鉢 (把手)	2区	NR1上層 機械掘削	－	－	(3.55)	10YR8/3	10YR6/4～ 2.5YR6/8	普通	φ2mm程度の白色粒を多く含む	把手部分	指おさえ	指おさえ	

表1　遺物観察表

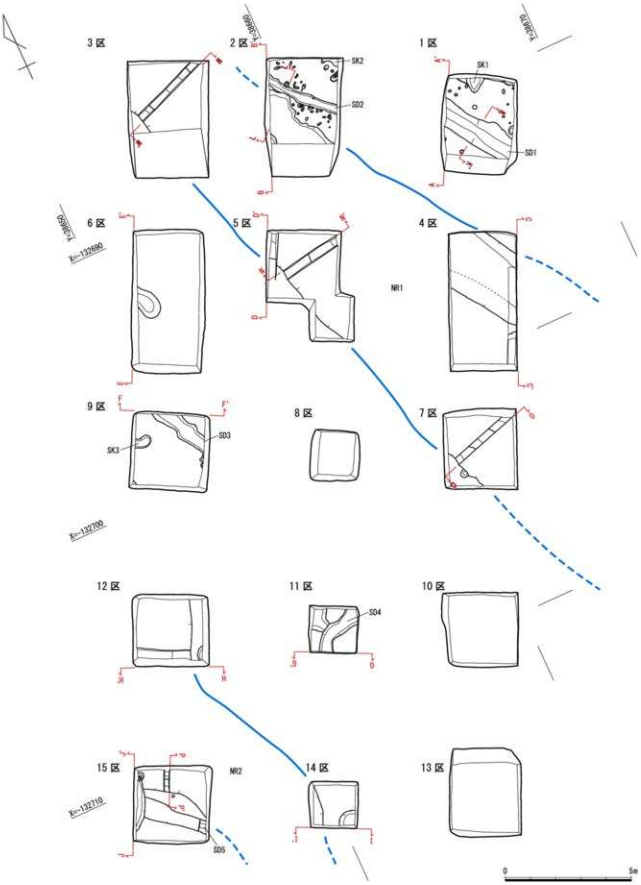

図3　調査区平面図（S=1：150）

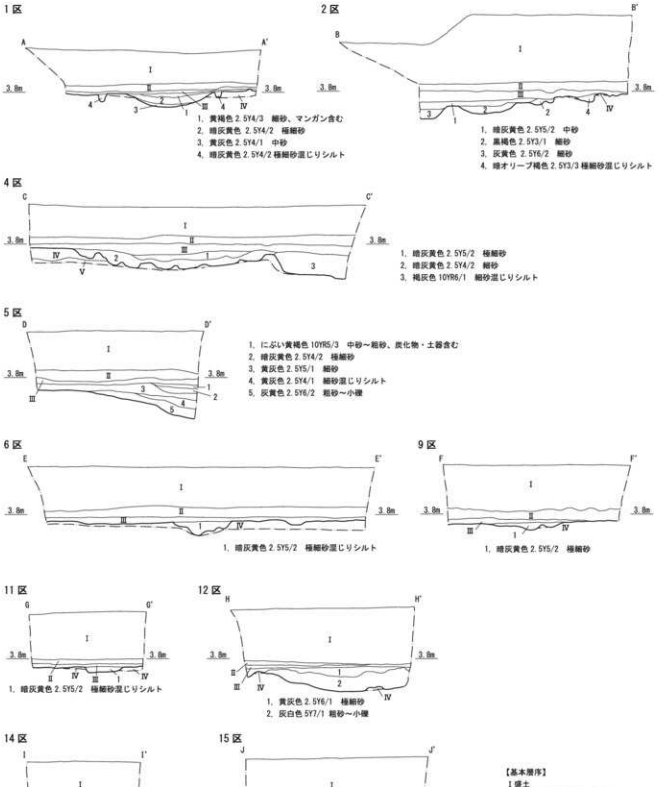

図4　調査区断面図（S=1：60）

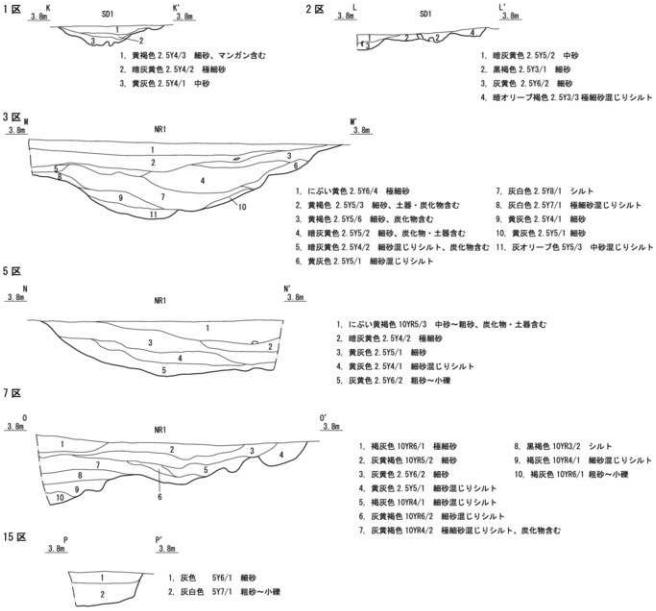

図5 遺構断面図（S=1：40）

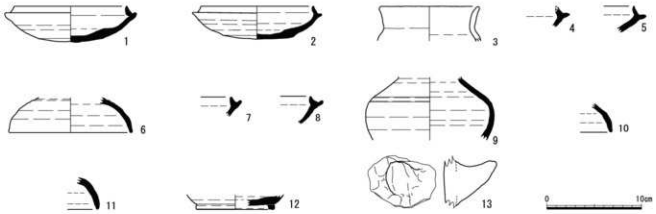

図6 遺物実測図（S=1：4）

1 区 SD1（南より）

2 区 NR1（南より）

3 区 NR1（南より）

5 区 NR1（北より）

7 区 NR1（南より）

12 区 NR2（北より）

14 区 NR2（東より）

15 区 NR2（西より）

1区 SD1 土層断面（南西より）

3区 NR1 土層断面（南西より）

出土遺物

報告書抄録	
ふりがな	べっしょむらまえいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	別所村前遺跡発掘調査報告書
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第67集
編著者名	間　梓
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター
所在地	〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1　　TEL（079）252-3950
発行年月日	平成30年（2018年）3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
別所村前遺跡（べっしょむらまえいせき）	兵庫県姫路市別所町別所字加茂下1899番（ひょうごけんひめじしべっしょちょう べっしょあざかもし）	28201	020561	34°80′30″	134°75′57″	2017.6.13～2017.6.27	113㎡	工場建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	遺跡調査番号
別所村前遺跡	集落	古墳時代	土坑・河道・溝	須恵器・土師器	20170115

例言

1．本書は、姫路市がテクノプロパイダー株式会社の委託を受け、姫路市別所町別所字加茂下1899番に所在する別所村前遺跡（県遺跡番号020561）の発掘調査報告書である。
2．発掘調査の実施ならびに本報告書の刊行に際しては、テクノプロパイダー株式会社に多大なるご協力を頂いた。
3．現地調査及び整理作業、報告書の編集は、姫路市教育委員会　生涯学習部　埋蔵文化財センターが実施した。
4．発掘調査で得られた出土遺物、図面、写真等は姫路市埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡例

1．発掘調査で行った測量は、世界測地系（測地成果 2000）に準拠する平面図直角座標系第Ⅴ系を基準とし、数値は＝単位で表示している。
2．本書で用いる標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とし、使用する方位は世界測地系の座標北である。
3．遺構・土層等の呼称は、調査時の番号を基本とするが、整理に際して変更したものである。
4．土色と土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編 2003『新版　標準土色帳　25版』日本色研事業株式会社に準拠した。
5．遺物の計測値と観察所見は観察表を作成し、まとめている。出量は、残存率が1/4未満の部位に関しては、（　）を付けて復元した数値を示している。

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第67集

別所村前遺跡発掘調査報告書

編　集　姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1
発　行　姫路市教育委員会
〒670-8501　兵庫県姫路市安田四丁目1番地
発 行 日　平成30年（2018年）3月31日
印刷・製本　富士高速印刷株式会社
〒679-4232　兵庫県姫路市林田町上伊勢962-3